

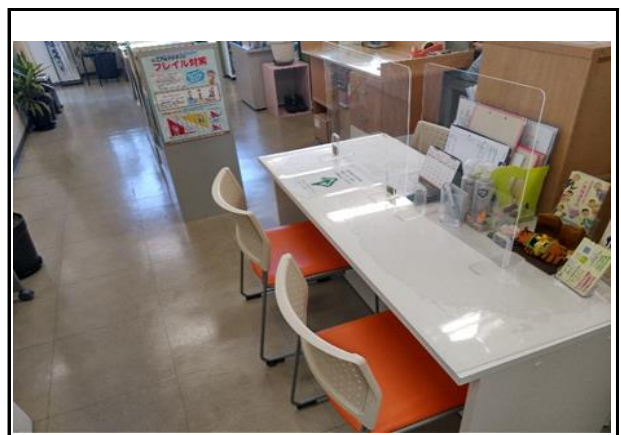
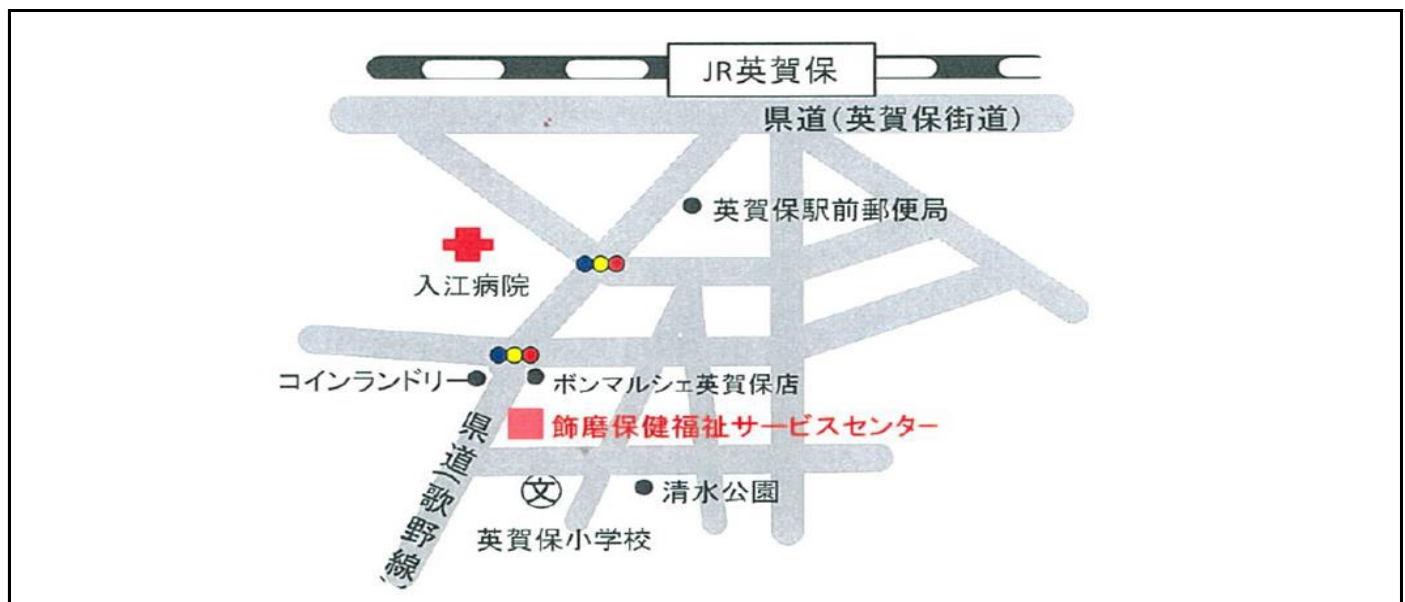
地域包括支援センター適正運営評価 基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	姫路市飾磨西地域包括支援センター
法人名	社会福祉法人敬寿会
所在地	〒672-8084 姫路市飾磨区英賀清水町一丁目5番地1
電話	079-240-6528
FAX	079-237-8048
ホームページURL	https://www.shikamanosato.com

【センターの案内】

センターまでの 交通手段	JR英賀保駅を下車。英賀保駅前のJAの前を南に下がり徒歩10分。 スーパーボンマルシェの南側にある飾磨保健福祉サービスセンター内。 駐車スペース有
-----------------	---



【センターが所在する地域の特徴・特性】

英賀保地区は(人口14,017・65歳以上人口2,905人・高齢化率 20.7%)英賀神社、英賀城跡など歴史と文化の香る地域で、英賀神社では毎年10月17日・18日に秋季例大祭が行われ地元住民同士の繋がりが強い地域です。JR英賀保駅北側の土地区画整備事業が進み、住宅地や公園、JR英賀保駅北側改札と自由道路等の整備が来年度の完成に向けて進んでいる。製鉄記念広畑病院の跡地も、「医療・介護ゾーン」として特別養護老人ホームや有料老人ホームが新たに開設された。

津田地区(人口16,036人・65歳以上人口3,763人・高齢化率23.5%)は区画整備事業により道路整備や宅地化が進んだ。臨海部は工業団地が造成されている。津田天満神社の秋祭り等の伝統行事が各町で活発に行われており、住民の繋がりが強い地区です。

校区全体では、特別養護老人ホーム、有料老人ホーム(介護型)、入院病床のある病院や看護小規模多機能型居宅介護、グループホームやショートステイがそれぞれ1箇所ある。ケアマネジャーが在籍する居宅介護支援事業所や、訪問系サービスや通所系サービスも複数あります。また、サービス付き高齢者向け住宅や高齢者専用住宅が5箇所あります。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

- ①朝礼の時間やミーティングを通して、地域包括支援センター内で相談対応の内容や地域活動等の情報共有を行う事で、チームアプローチが実施できているようにしている。
- ②自治会や民生委員、地域住民の方と顔が見える関係が築けるように夏祭り等の地域行事や通いの場、地区社協が主催するふれあい給食やふれあいサロン等で様々な啓発活動を行ったり、自治会の会議や民生委員さんの会議にも参加したり講義を行う事で、地域の方が地域包括支援センターが高齢者の身近な相談場所であることを積極的に周知している。
- ③認知症患者家族会の協力を得て認知症の方やご家族の方が地域に関係なく参加でき、気軽に話し合える場(ラフrafの会)を毎月開催している。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

- ①いきいき百歳体操や認知症サロン等の通いの場やのべ参加者が増える。
- ②地域の高齢者の相談窓口である事を広報し、相談者数が増加する。
- ③いきいき百歳体操や認知症サロンの通いの場が維持・継続できる。
- ④多世代への認知症サポーター養成講座が開催できる。

地域包括支援センター適正運営評価 評価意見書(総評)

センター名称	姫路市飾磨西地域包括支援センター
実地調査日時	2024年 10 月 30 日

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

○地域包括支援センターへの相談をよりしやすくなる方法として、メールでの相談に力を入れており、相談件数が増えています。祭りや地域の集まりには積極的に参加され、包括支援センターの周知や関係づくりをされています。

○地域支えあい会議の開催回数は多く、地域課題の把握や課題解決に取り組まれています。

○介護予防体操には「ガンバルンバ体操」を考案した先生に来ていただき、楽しく体操に取り組める工夫をされたり、介護者が日頃抱えている悩みや不安を話し合う場として、認知症介護者のつどい「ラフラフの会」を毎月開催されています。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

○生活支援体制検討会議は1カ所で年1回開催されていますが、地区によって特徴や特性が異なるため、地域の課題を把握し、その課題に応じて必要な社会資源の開拓や通いの場の拡充、あんしんサポーターのマッチングなど、地域で支える取り組みの充実が期待されます。また、通いの場に参加しにくい方に対しての支援について、情報収集と在宅でできるフレイル予防などの情報の周知など、より能動的に取り組まれることを期待します。

○地域の気づきを集約し、今後想定される困りごとに対するアプローチ等を検討する機会を作ること、これからの支援に活かされることを期待します。

【市民(住民)からの意見やコメント】

○道路脇の植栽に飾磨保健福祉サービスセンターの看板が設置されていますが、飾磨西地域包括センターの案内はないので北側から来るとセンターが分かりにくいです。

○事務所に相談の窓口と簡易な相談室が設けられていますが、個人情報の観点から疑問が残ります。別室の相談室の活用が望まれます。

○資料を多数拝見いたしましたが、高齢者等に分かりやすい文章をお願いしたいです。

○情報提供や相談窓口として、「ライン」の活用を検討されているので早期の実現に期待します。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

今後も地域の活動に積極的に参加することで、地域住民の方と地域包括支援センターの関係を築き通いの場の必要性やフレイルチェック等を通して介護予防の啓発や認知症に関する啓発活動を分かりやすく伝えられるように活動していきます。

評価項目・着眼点		地域包括支援センターの体制確保
		(基本的な考え方) 地域包括支援センターは地域包括ケアシステムのコーディネーターとして、高齢者分野の困りごとを地域で受け止める役割を果たすものであり、地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割として地域で認識されることが必要です。
		① 地域包括支援センターの周知
		② 地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。
		③ 専門性を生かした地域包括支援センターの運営
		④ 専門知識、対応力を備えたセンターのスタッフの確保と人材育成を図る。
セ ン タ ー 記 入 欄	取り組みの状況	・地域の通いの場や社協支部事業のサロン、ふれあい給食などの活動や地域の夏祭りなどの地域行事にも積極的に参加し、地域住民と顔の見える関係性を大切にし、地域包括支援センターが身近な相談先であることを周知している。また、毎朝の朝礼で、総合相談の内容や地域活動の情報共有や報告を行い必要に応じて事例検討を行っている。チームで対応の検討や重層的な相談や精神疾患等に関係するケースの場合には他機関にも相談できるようにし、地域包括支援センターだけで抱え込むことがないようにできる体制をとっている。研修にもオンラインを含めて参加できるようにし、職員の知識の習得になるように支援している。
	現在課題と 感じていること	・通いの場などに参加されている方には地域包括支援センターの認知度は高いが、参加されていない方や働き世代や若い世代に向けた地域包括支援センターの認知度はまだ高くないと感じている。 ・紙媒体で保管する書類も多々あり、保管管理場所の課題がある。
	目標達成の ための今後の 取り組み	・地域の中で各種団体や世代を越えた集まりの場を地域包括支援センターが把握し、連携できることを発見し、多世代に向けて地域包括支援センターの周知ができるようにする。 ・チームアプローチに必要な包括内の良好な関係づくりのため、毎朝のラジオ体操や朝礼を続けることでチーム内の連携をより図れるようにする。
	評価で確認 した特徴的 な取り組み や工夫点	地域包括支援センターへの相談は、土日祭日・夜間も電話受付・対応が出来る体制になっています。メールでの相談受付を始めてからは、メールでの相談件数が増えています。また、世代間の多い集まりに積極的に参加され顔の見える関係づくりをされています。地域包括支援センターでは職員間のコミュニケーションを大切にされ、全ての職員が活発に意見交換をされて、ラインの活用など新しいことへも取り組まれています。研修にオンラインを取り入れることで参加しにくかった職員も参加され知識習得をされています。
評 価 調 査 者 記 入 欄	次のステップ に向けた 気づきや期 待したい点	広報誌や地域の集まりで地域包括支援センターの役割や相談機能について周知されていますが、若い世代にも周知されることを期待します。また、ICTを使つての情報発信や活動案内、ネットワーク作りなども期待されます。

評価項目・着眼点		基本目標1:生きがいを感じながら暮らすための支援の充実
		(基本的な考え方) 人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。
		介護予防に関する認識の変革
		① 85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。 市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。
		② 高齢者が通える場があるまちづくり 介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。
センター記入欄	取り組みの状況	・地域活動として地域包括支援センターが支援している「いきいき百歳体操」や「認知症サロン」への参加を地域住民や総合相談に来られた方へ参加の声かけを行っている。また、参加されている方には継続した参加ができるように地域活動の場所に定期的に訪問し、顔が見える関係性を維持し、参加者の様子伺いや代表者への支援を行っている。 ・年1回のフレイルチェックを実施し、介護予防の啓発に取り組んでる。フレイルに関する啓発等を毎月広報している。 ・介護予防教室として月1回コグニサイズ、2か月に1回健康体操を実施している。
	現在課題と感じていること	・新しい参加者がなかなか増えない。地域とのつながりが少ない方は地域の集まりの場には参加しにくい。 ・居住場所によっては通いの場から離れている事もあり、身近な場所に通いの場が十分でない。
	目標達成のための今後の取り組み	・地域の様々な集まりの場に出向き、地域とのつながりの大切さや、介護予防についての啓発を行う。 ・地域の公民館や集会所、店舗などが地域の集まりの場に利用できないか検討していく。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	どこの地区の方でも参加がしやすいように、英賀保公民館で健康体操教室と脳活体操教室を定期的に開催されて介護予防に努めておられます。いきいき百歳体操は21カ所、認知症サロンは5カ所で活動をされており、地域包括支援センター職員が出向いて様々な啓発活動や継続支援をされています。地域包括支援センターには経験年数の長い職員が在籍しておられるので、通いの場に来られなくなった方の情報把握や声掛けをすることができています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	それぞれの地域の特性に合わせたアプローチを行い、通いの場の拡充や参加促進が望まれます。また、あんしんサポーターや認知症サポーターの登録者数増への働きかけや通いの場での支援活動への参加促進に期待します。

評価項目・着眼点		基本目標2: 困りごとを地域全体で受け止める体制の構築
		(基本的な考え方) 日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。
		地域包括支援センターの相談機能強化
		① 地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。
		世代や分野を超えた地域のつながりの構築
セ ン タ ー 記 入 欄	取り組みの状況	圏域内のドラッグストア・郵便局や金融機関・スーパー・クリニック等へ地域包括支援センターの活動を周知している。また、社協支部事業として開催しているサロンや公民館でのサロンへ参加し包括の活動内容を周知している。また、民生委員の定例会や地域支え合い会議の開催などを行い地域で気になる方の情報として包括に相談が寄せられている。その他、保健センターの精神保健の担当や生活援護室、基幹相談支援センター(ひめりんく)などの多機関との連携を大切にしている。包括内においては総合相談の内容を共有し支援の方向性をチームで検討できるような体制をとっている。
	現在課題と感じていること	・地域包括支援センターの知らない方が若い世代や働き世代に多い。 ・支援困難な相談対応により、解決までの期間が長くなっている。
	目標達成のための今後の取り組み	若い世代へにむけて地域包括支援センターの啓発や支援が困難な事例に対するチームアプローチの方法について研修などを行い対応力を身に着けたい。
評 価 調 査 者 記 入 欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	令和5年度は地域支えあい会議を13回開催され、でてきた課題は地域包括支援センター内で検討され、ノートにまとめて付箋を付けて整理されています。郵便局や金融機関、スーパーや新聞販売店などから気になる高齢者の相談が増え、その都度対応をされていることがうかがえました。困難事例が増えていますが、民生委員に協力いただいたり、保健センターやひめりんくなど他機関と連携することで対応されています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	「高齢の親と精神疾患や障害を抱えたこども世帯」など、複合的な課題を抱えるケースが増えている中で、地域包括支援センターの専門性を活かし、医療や障害分野、行政などの他分野が連携して地域で支援を行う体制を構築していくことが期待されます。

評価項目・着眼点		基本目標3:地域で暮らし続けるための支援の充実
		虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。
		多様なサービスの活用
		① 地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用する。
		② 地域活動への住民参加や支援体制整備のための取り組み
		③ 地域社会資源の開発とネットワークのための取り組み
センター記入欄	取り組みの状況	総合相談の場面でインフォーマルサービスや地域の通いの場への紹介ができるように、情報共有を包括内で適宜行っている。また、自立支援検討会議への参加やその情報共有などを行っている。フレイル予防に向けた地域への啓発活動を行い、通いの場の新規立ち上げもできた。また、あんしんサポーターさんの交流会も実施し、ボランティアとしての参加が自身のフレイル予防になる事などを周知した。また、マンション自治会組合にも通いの場などへの重要性などについて一緒に検討し、多世代参加のサロンを開催することができた。こども食堂でも防災や地域包括支援センターの広報活動を行った。
	現在課題と感じていること	・地域の通いの場が圏域内に均等でない。 ・地域のケアマネジャーに向けて地域活動が十分に情報提供できていない。
	目標達成のための今後の取り組み	総合相談や日々の地域活動の支援、生活支援体制検討会議や地域支え合い会議などで得られた高齢者のニーズと地域の特徴をふまえて、それぞれの地域において重要になる活動や今後必要と思われる活動等について分析を進めていく。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	グランドゴルフやカラオケ、囲碁将棋など地域主体での活動の場が多く、地域資源を一覧冊子にしてケアマネジャーに情報提供をされています。英賀保公民館で開催されている健康体操教室では、家の中でもできることを伝え、通いの場に参加されない高齢者には広報誌の回覧や民生委員が訪問して周知されています。民生委員は地域包括支援センターと連携をして活動をされており、地域支えあい会議を13回開催され、多様な個々のケース課題について検討がすすめられています。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	生活支援体制検討会議は1カ所で年1回開催されていますが、地区によって特徴や特性が違いため、地域の課題を把握し、その課題に応じて必要な社会資源の開拓や通いの場の拡充、地域で支える取り組みの充実が期待されます。

評価項目・着眼点		基本目標4: 認知症とともに暮らす地域の実現
		認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防(認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする)に関する取り組みを推進します。
		① 認知症にやさしい地域づくり
		認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の人本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を設置する。
		② 認知症になるのを遅らせるための取り組み
		高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。
センター記入欄	取り組みの状況	・認知症への正しい理解のために地域住民や店舗、金融機関等などに積極的に出向いて認知症に関する情報の啓発を行っている。また、地域の通いの場への継続参加を周知したり、サロンでは年1回フレイルチェックを実施し参加者へ自身の生活習慣などを振り返る機会を持っている。また、今年度からは認知症気づきチェックリストを配布しMCIの周知と早期受診の啓発も行っている。認知症の相談窓口として包括センターの周知を行ったり家族の会(ラフラの会)を実施し、月1回、家族同士の交流や情報交換の場となっている。
	現在課題と感じていること	・認知症の方の家以外の居場所が少ない。 ・認知症サポーターさんが活躍できる場がまだ少ない。 ・認知症にならない(予防)に関心が高く、備えることへの意識転換のための取り組みが必要と感じている。(新しい認知症観への転換) ・多世代に向けた認知症の啓発
	目標達成のための今後の取り組み	・認知症になっても、本人が望む地域活動に参加できたり、今までの暮らしが続けられるように地域住民や事業所などに「新しい認知症観」や「予防への備え」について周知している。 ・多世代に向けて認知症に関することや地域包括支援センターについて周知できるように地域の集まりの場の情報収集を行い、啓発の機会を持つ。 ・本人の居場所となり得るような地域の中の社会資源の情報収集を行う。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	認知症の相談は多く、多方面からの相談に対して支援が行われています。介護者が日頃抱えている悩みや不安を話し合う場として、認知症介護者のつどい「ラフラの会」を毎月開催されています。認知症の方が自由に気軽に参加できる集まりの場の開拓や、仕事や役割を持って生きがいに繋がれるよう、認知症に対する正しい理解の周知に取り組まれており、学校や子ども食堂など、多世代にも認知症サポーター養成講座の周知をされています。また、今年度は1件、成年後見制度の利用に繋がられました。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	認知症サポーター養成講座や認知症ケアパスを活用して認知症に関する知識を多世代に周知したり、認知症サロン以外にも認知症サポーターの活躍の場を広げ、認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる共生社会への実現が期待されます。